

生まれ変わる先は女尊男卑

灰TS

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある交通事故で死んでしまった青少年…

(償いで) 神様が青少年の希望で送った世界はISの世界だった！

過去の世界から襲いかかる謎の敵…

青年よ、愛する者を守り通す勇氣はあるか？

目次

第零話 「地平線の無い白い世界の中で」	1
二次創作小説原案その1：オリジナル主人公、オリジナルキャラクター及び、追加設定等①	4
二次創作小説原案その1：オリジナル主人公、オリジナルキャラクター、及び追加設定等②	7
二次創作小説原案その1：オリジナル主人公、オリジナルキャラクター及び、追加設定等③	12
二次創作小説原案その1：オリジナル主人公、オリジナルキャラクター及び、追加設定等④	16
第一話 新天地にて	20
第二話 この羊は狡猾に非ず／その名はΣ（シグマ） 前編	27
第三話 この羊は狡猾に非ず／その名はΣ（シグマ） 後編	32
第四話 篠ノ之箒、理解者（兼相談相手）を手に入れ良いスタートを迎える	43

第零話 「地平線の無い白い世界の中で」

「……？」

うつぶせの体勢で心地よい眠りから覚めた青少年は、
体を起して立ちつつ現在自分の置かれている状況を確認する。

「……なんだ此処は？俺は一体どうなっちゃってるんだ？つかこの
場所少し気持ち悪いな。」

青少年が気持ち悪がるのも無理はない。なぜなら青少年が今立っ
ている空間は、地球上に必ず存在するはずの地平線がなかったから
だ。

自分が今立っている地面さえ白くしかし自然的な暖かさは感じら
れた。

何十年経過しようとは何も変わりそうもない白い空と何時間走り続
けようと目的地にたどり着けなさそうな「道」

が青少年の焦燥感、不安、危機感を少しづつ確実に煽り立てている。
「俺以外に人がいる気配はなさそうだな。というかなんだこの服？
まったくセンスの欠片もないな。」

青少年が今着ている服は、下半身がある程度厚く、内側に紐があり
チヨウチヨ結びになっていて着心地が

良いスウェットのズボンと上半身が長袖のヒートテックの上に
フード（毛皮付き）付きのジャンパーになっていた。

人目からすれば冬場には適している服装に見えた。

それがすべて「白色」一つだけで統一されていなければ……
「酷いもんだぜ。此れはともかく、もしかして誘拐されたのか？いや、
ないな、絶対。それと制服何処だ？」

「……あ。」

そう、青少年は段々と思いだしてきたのだ。自分がここにいる理由
を。

何故制服ではなく個性的な服装で居る理由は分からないが。

「俺……死んだのか？あのときお婆さんを助けてトラックに撥ねられ
て、死んだのか？……嘘だろ。」

青少年は、頭を抱えてへたり込んでいた。そう、青少年はまだ若い17歳なのだ。

親友や友達と談笑したり、将来を考察する大事な時期に不幸にも交通事故に遭い死亡してしまったのだ。

「まさかここが天国なのか？随分と味気ない場所だな。」

「お前さんと面と向かって話をするために、わしが作った空間じやよ。」

「!?誰だ！」

響く声の主である老人を探すために辺りを見回すが当然誰もいない。

だが青少年の真後ろにどこかのスクエニ作品の扉がどこからともなく表れた光を集約させ出現。

その扉が開いた瞬間、ハリー・ポッターのアルバス・ダンブルドアの様な出で立ちの老人が眩い光の尾を引きながら現れ、事情を説明する。

「お前さんの死は必然ではなく、儂らが突発的に招いた事故なんじやよ。」

「なん・・・だと・・・」

「儂が他の神と人生ゲームをしていたところなんじやがな。一緒にゲームをしていた連中の一人がビリになり、儂が一番じやつたかのう。」

その時に指が滑って何の不幸かは知らないが奇跡的な確率でお前さんに指差した事が原因で本来ならば早すぎる死を

与えてしまったことが引き金となりこんな事態を起こしてしまったのじゃ・・・面目ない。今更謝って許してもらおうなどは思わん。」

青少年は非常に慌てた。それもそれは今目の前にいるのは、紛れもない神。その神が自らの過ちを悔み肅々としているのだから、

慌てざるを得ない。

「(ただスケールのかい人生ゲームしてたんだよ...) いえいえ、誰だっとうっかりとか突発的なトラブルはしちゃうもんですよ。」

「...そうじゃ...このお詫びにお前さんを望む世界に転生させてあげよ

う。転生する前に何か欲しいものがあつたら、遠慮なく言ってくれ。可能な限り応えて見せよう。」

青少年は考えた。其処に煩惱など介在する間は無かつた。

生前にも二次創作小説を数多く閲覧していたからだ。まさか自分にこんな日がこようとは予想が出来なかつた(元々予想出来る訳がないが)。

青少年が出した答えは・・・

「IS (インフィニット・ストラトス) の世界に転生したいです!」

…前言撤回しよう。「過程」に煩惱は無かつたが、「結果」に煩惱があつた。

「もしあそこの世界に転生できたら、色々やりたい事があるんですよ。取り敢えず具体的な希望を示したので、

机と椅子とシャープペンシルと消しゴムとノートを出してくれませんか?」

「かなり自信満々じゃな。分かつた。ほいつ。」

神が指パツチンをした2秒後、青少年の真横に新品同然の机と椅子等が手品の様に現れ、早速添削取り組む。

「随分長く書きそうじゃな。」

「この調子だと8ページ程度で収まりそうですけどね。」

1時間後、細かい設定が描かれた名前付きのノートを紙に手渡す。「出来ました!我ながら想像以上の出来栄です!惚れ惚れしちゃうもんですよ!」

「若干長いが表現が解りやすく、簡潔じゃから全く問題なしじゃ。心の準備が出来たらいつでも言ってく:」

「お願いします!」

「早!まあ良い:ほいつ。」

神が2回目の指パツチンをした瞬間、青少年が立っていた床に、一人通り抜けられる穴が出現し、真つ逆さまに落ちてゆく。

「うお!奈落の落とし穴かよ!」

「頑張るんじやぞ!」

青少年の意識はブラックアウトし体は暗黒の中へ消えて行つた:

二次創作小説原案その1：オリジナル主人公、オリジナルキャラクター及び、追加設定等①

名前：八神輝刃（やがみ えいじ）

歳：20

血液型：AB型

慎重：188cm

性格：誠実で優しくかつ勇敢な性格。だが戦闘時は本人いわく「自分より弱い敵でも容赦しないし、手加減するつもりは無い。」

正々堂々と戦おうとしている相手に対して失礼」と訓練や練習試合でも素人相手に、ビーム兵器と弾丸の雨を降らせる。

転生前は女子との交友関係や付き合いに関しては、皆無かつ奥手で女子にも問題があったことやから

距離を置いていた。しかし転生後、IS学園での生活や様々な仲間たちとの邂逅により克服していく。

設定：一人称は「俺」、「私」とある交通事故により死んでしまおうが、実はそれは神様が他の神様たちと一緒にボードゲームをしていたところ、誤ってその際のペナルティの対象を間違えた為に死なせてしまう。その償いと称し輝刃の希望通りの別の世界に特殊能力や特殊技能を与えて貰い、IS（インフィニット・ストラトス）

の世界に転生することとなる。

転生後の容姿は無双ORROCHI2の仙人「?」（死亡前）にCS

I：NYの検視官「シド・ハマーバック」が着用している『Clic readers（クリックリーダー）』と呼称される真ん中の部分が着脱可能な眼鏡を常に首にかけている状態。

特殊能力・特殊技能：

・機動戦士ガンダムのUC（ユニバーサル・センチュリー）時代でも最強のMSパイロット「アムロ・レイ」の全盛期と最新作ガンダムUC（ユニコーン）のニュータイプパイロット「バナージ・リンクス」のパイロットスキルとニュータイプの力を掛け合わせたものを追加

(MSでの操縦経験をそのままISの戦闘経験値に転用する)。

・機動武闘伝Gガンダムのガンダムファイター「東方不敗マスター・アジア」の身体能力や格闘技を追加。

・機動戦士ガンダムOOの西暦世界のガンダムデュナメスのガンダムマイスター「ニール・デイルンデイ」とケルティムガンダムのガンダムマイスター「ライル・デイルンデイ」の射撃技能を掛け合わせたものを追加。

・機動戦士ガンダムOOの西暦世界の純粹種の革新者(イノベーター)及び、ガンダムエクシア、ダブルオーガンダム、ダブルオークアンのガンダムマイスター「ソラン・イブラヒム(刹那・F・セイエイ)」の革新者(イノベーター)の能力を追加。

・機動戦士ガンダムSEED:DESTINYのCE(ゴズミック・イラ)最強のMSパイロット「キラ・ヤマト」の空間認識能力・演算処理能力を追加。

オリジナル機体:

機体名:創世者(ザ・クリエイター)

機体設定:IS初の展開時の形態を持たなくかつ、単一仕様(ワンオフ・アビリティ)や専用武装

を一切持たない稀有なIS(本人曰く「戦えないIS」)。

しかしこのISは、試験運用、実戦運用のデータやカタログスペックのデータが有れば専用機だろうと

無人機だろうとISを拡張領域内で精製し、有人機製にも、基地防衛用の無人機製にも作り変えて量産することが可能。

しかも操縦者に対応して新しい新装備を文字通り「創る」事が出来る。

拡張領域は現行ISを遙かに上回り(ラファール・リヴァイヴ・カスタムIIの拡張領域が20体のところ、

創世者は2000体)、複製したISの性能はオリジナルに比べ?

☒の技能が反映されており、回避運動が

最小限に抑えられ、射撃・格闘・防御に於いても目覚ましい向上がみられる。単一仕様は一部を除き使用できないが、

高速切替（ラピッド・スイッチ）が標準装備されている。
補足：創世者の待機状態はゴッドイーター2の主人公の腕輪。
部位は右手首。

二次創作小説原案その1：オリジナル主人公、オリジナルキャラクター、及び追加設定等②

前：八神素戔鳴（スサノオ）

血液型：A B型 歳：50

身長：195cm

性格：真面目で正義感に溢れかつ、冷静に物事や状況を整理する事が出来る。

陰謀やテロ、悪を嫌っている。

関係のない市民を巻き込んだり、人の命の重さを軽んじるテロリストを憎悪している。

しかし潜在的に自分の価値観を他人に押し付けてしまう傾向があり、

自覚はあるものの、なかなか直せず輝刃に事あるごとに諫められている。

容姿は無双OROCHI2の素戔鳴を人肌にしつつ、ポニーテール（黒髪）

の髪に一部金・銀がかかった感じ。

設定：一人称は「我」。輝刃の父にしてIS学園設立以来、幾度となく企業スパイや亡国企業の襲撃から守り抜いてきた歴戦の猛者。

自他共に認める通称『学園の守り神』。

篠ノ之 束、織斑千冬と共にIS開発に携わった中心人物であり千冬同様、驚異的な身体能力と他の追従を許さない操縦技術、指揮能力、カリスマ、そして千冬には無い強力なBT適性を併せ持ち現役ISパイロットの中でも最高クラスの能力を誇る人物である。

『白騎士事件』の際、ISの力を「新時代を拓く力」として振るい、第零世代専用機『灰騎士』と白騎士の両機を鹵獲するために派遣された各国の航空戦力・戦闘艦等の軍事兵器を僚機の援護無しで圧倒的な火力にて殲滅。屠った者達を「旧き時代にしがみ付く汚い愚か者」と称した。

自身が建てた計画に則れば千冬を陣営に引き入れ、盤石の体制を以て組織を作る筈だった。しかし不殺を貫徹してISの有用性を証明する予定だった束は苛烈な攻撃によって海に墜ちゆく兵器だった物を見せつけられ、計画が崩壊し再度立て直す事に決めた。

だがもう一つ、スサノオに対するせめてもの対応策の為に灰騎士に施した細工を起動させた。

スサノオと束はスサノオが決定的に優勢な状態という圧倒的不利な状態に対立する事になった。呆然とする千冬を前にその手を取ろうとした灰騎士の左腕が爆発し、血飛沫とスパークする左腕の付け根に意識を割かれているスサノオの首の頸動脈に薬品が注射される。

この薬品は人体の老化を著しく加速させる効果と、ISに対する拒否反応を励起させる効果が存在する。

脳がISを拒否する激痛と身体の自由が奪われる恐怖に襲われながらも鋼鉄の精神で正気を保ち千冬を放置して離反。

これ以降スサノオは厳しい体力トレーニングと薬剤投与を行い、15分程度なら戦闘に参加出来る程に回復した。50歳という表記は薬品の影響で加齢が加速している状態。

離反後は自身の能力とIS開発時代から着々と広げていた長大なコネクションを活かしつつ、

IS本来の機能である宇宙空間での活動及び、宇宙進出のためのマルチフォーム・スーツ機能を発展させる為、篠ノ之 束に匹敵する頭脳を持つ科学者やエンジニア、メカニック、

優秀な素質を持つ人物を各国から勧誘、招聘。

更に、宇宙での半永久的に生活するための居住空間であるコロニーを

想定して広大な人口島兼プロトタイプ・コロニー『テラ・フュージョン』を建設。

「難民&戦災孤児支援」「全テロ組織、凶悪テロリスト及び、前述になる可能性のある危険因子の排除」

・「宇宙完全進出」の四つを目的とした、最新鋭IS及び、試作型I

Sのみで構成された地球治癒機関『Z E U T H』の最高司令官である。輝刃の自身にも届きうる驚異的な能力と模擬戦での一対多の戦闘で未だ一度しか顔合わせしていない同僚の癖を見抜き、完全に息を合わせ勝利できたコンビネーションを見込み、

いずれ来る宇宙進出時代の際、自身の跡を継いで“真に”正しい眼を持って人類を導いてもらうために

輝刃にZ E U T Hへの入隊を打診。輝刃は此れを了承し軍隊入りが決まった。

これにより輝刃は様々な人物との邂逅を持って心身を成長させ、また、彼と彼に関わった者達の“運命”を変えてゆく。

オリジナル機体：

機体名：ガンダムA G E I F X Z . T . C . D

機体設定：

篠ノ之 束が自らが発案した超技術をを集積させたデータバンク、通称【遺産】から分析した技術を元にZ E U T H内に存在するI S開発班によって製造された、スサノオ専用のI Sである。

元々はI S開発時代から愛用されている『灰騎士』を改修してF Xを製造する予定だったが、度を越した強化プランに機体が耐えられない事が判明したので過去の戦闘が記録されているコアパーツのみを摘出し旧パーツは廃棄する事になった。

【Z . T . C . D】とは「ゼロ・ツイン・コア・ドライブ」の略語であり、異なる動力をI Sに搭載させる事によって機体性能を爆発的に向上させるシステム『ツインコア・ドライブシステム』の試験機でもある。

武装一覧：

高性能近接ブレード『三叉陽炎（サンサ・カゲロウ）』×3

F Xの主武装の一つ。ブレードは、ガンダリウム合金とEカーボンの複合製だが、表面に積層化された

ビーム・コーティングが施されており、盾代わりに防御する事が可能。

のちに改良が加えられ拡張領域に直接別途で動力源であるG

Nドライブをインストールし、ドライブから放出されるGN粒子を本武装にコーティングする事によって、織斑一夏の専用機『白式』の単一仕様『零落白夜』と同様の効果を得ることに成功した。

因みにZEUETH製の量産型、隊長機、ガンダムタイプ、ASTRAYタイプのISは、作戦行動時に武装に何らかの

不具合の発生、もしくは敵機の攻撃による破壊、急を要する作戦状況から展開する時間が無い場合を想定し、科学者たちの弛まぬ努力と汗と涙とコーヒーの結晶

(ビームライフル、Eパックの規格共通化。代替使用時の機体動力源からの早急なエネルギー供給、

両腕の肘に存在する多目的武装ラックの規格共通化等……)により、

一部武装を操縦者の許可無しに使用することが可能。

本武装の特性上、『攻撃』と『防御』を同時に行う事が可能である。この事からFXには素戔嗚の利き腕ではない右腕には武装ラックが搭載されていない。

高性能BT兵器『猛将衆』×14

篠ノ之束の遺産の技術を参考にして開発された脳波操作型無線誘導兵器である。

この兵器の概ねのイメージとしては『機動戦士ガンダムAGE』における第三部以降の主人公にあたる『キオ・アスノ』が登場するXラウンダー専用MS『ガンダムAGE—FX』の最も特徴的な武装である『Cファンネル』を推進器部分以外の攻撃箇所である『シグルブレイド』を透明にしている。

本人曰く『こちらに向かつて攻撃してくる動体物がある事が分かっているのならば、限りなく防御できぬように距離感を喪失させた方が精神にダメージを与えられるのではないかと思っただけ進言した』と話している。

他武装一覧：

スタングルライフル×2丁

タイダルバズーカ×1丁
ジnkスIVビームライフル×4丁
ジnkスIVビームバズーカ×4丁
ブレイブビームサーベル×2本
マルチロツクオンGNミサイルランチャー×2丁

補足：王天の待機状態はゴツドイーター2の雨宮リンドウが着用しているガントレットの朱色版。部位は左腕。

『灰騎士』の待機状態は、灰色の機械的な義手（腕部は只の義手で本体は先端の手甲部分のみ）だったが根本的なシステムのアップグレードと推進システムやOSの大幅改良により大型化し、義手全体がISの機能を担っている。

二次創作小説原案その1：オリジナル主人公、オリジナルキャラクター及び、追加設定等③

名前：八神玉藻（タマモ）

血液型：A B型 歳：37

身長：180cm

性格：男顔負けの活発な行動力を持ち、何よりも自分にとって「間違っている」

と思っている事に関しては凄まじく辛辣である。

自分の教えを説く事に「愛」を感じており、頻繁に直属の精鋭部隊を

引き連れてIS学園を訪ねてきては実技授業に乱入し、

代理で講師を務めるも半ば本気でパイロットもろとも撃墜しようとするため

周囲の人間を困らせている（主に専用機持ちや生徒会長、織斑千冬や運営者の轡木十蔵《くつわざじゆうぞう》）。

しかし冷静で視野が広く緊急事態や予期せぬトラブルにも動じない器量を持ち合わせており、白式のエネルギー効率の悪さを懸念して世界的機械工学企業『リ・ホーム』の社長である

『ロウ・ギユール』に改造・改修を依頼している。

また、織斑一夏自身の全体的な戦闘能力の向上を図る為に、ホームと長期的契約を結んでいる傭兵部隊『サーペント・テール』のリーダー『叢雲劾』に試作ISのパーツを提供する代わりに、ZEU TH諜報部によって制作された偽造身分証明書を譲渡し、積極的に織斑一夏を対象に接触を行わせ成長を促すなど彼女の未来予測の様な考察は内部から高い評価を獲得している。

容姿はFate／EXTRAのサーヴァント『玉藻前』の髪を少し短くしつつ、カチューシャを着用した感じ。

設定：輝刃の母にして素戔嗚の夫である頼もしい女性。織斑千冬が決勝戦を辞退した第二回モンド・グロッソの優勝者であり、素戔嗚と

同じく長い年月から裏打ちされた経験則から

素戔鳴には劣るものの高い技量を誇る。

輝刃曰く『母さんは今の世界をISの本当の力を知らないくせに知った様に恐れ、縛りつけ、押さえつけているに過ぎないと言っていました。本来なら共に宇宙に飛び立って無限の進化を育むべきなのに、私達人間が卑しい望みの為に解り合わなければならぬ事実から目を背け、飛ぶ為に創られた翼を私達自身の手で折ってしまった、とも伝えました。』

地球も同じです。この星に根付く命は自然の深さを知り、解りあい、傷つけた罪を理解して償いをする必要があるのです。

だから、母さんは父さんと一緒に組織を率いて世界中を飛び回って地球の事を考えない連中を一掃して綺麗にしようかと決意したんです。分かりますか？織斑さん、束さんと一緒に白騎士を造っていた頃は仲が良かったのに今じゃ険悪な理由が？貴女がブリュンヒルデだからですよ。』

と痛烈に織斑千冬を批判したほど。

Z E U T Hでは主に作戦参謀を担当しており、彼女の考案した作戦の8割は採用され、全て成功している。

一時期、中規模テロ組織の殲滅任務の際に、彼女が編成した

IS中隊の隊員によれば『もしかしたら参謀こそがかの諸葛亮孔明の

生まれ変わりかもしれない。』と感嘆していた。

オリジナル機体：

機体名：プロト・アライヴ

機体設定：『第三世代型ISの開発・量産支援』と『Z E U T Hで運用されている量産型ISとフラグシップ機の再設計・強化改修』

の二つを目的とした極秘計画「メイク・アライヴ」によってデータ収集、新装備開発を目的とした第4世代型試作IS。

収集効率を上げるため採算性を極限まで度外視したトングデモ機体の為、FXに勝るとも劣らぬ性能を發揮。

彼女に合わせた調整を施した故、実質彼女の専用機である。

因みに本機にもFXと同じ様にTCDSを搭載している。

TCDSの0号機に当たるFXとは違い、その特性を遺憾なく發揮できるようにZETH内における超高性能ISがフルに性能を引き出す為の専用フレーム『Gフレーム』と量産型IS用の『ムーバブルアーマー』の開発にもこの機体の製造時に使用されたデータが採用されている。

武装一覧：

試作汎用複合武装 『フロントムー99S』

アライブの火力増強・戦闘支援を目的とした専用武装。

此れ一基に約7の火器が内蔵されており、TRAN—SMシステムを円滑に運用する為にアライブに元々搭載されている太陽炉の負担軽減に追加で2基の小型太陽炉とシステム解除後の性能低下を抑える為の特殊冷却材が実装されている。

主な内蔵火器・防衛兵装：

連装高出力ビーム砲 『ゴスペル』×2

対大型IS用突撃ビームセイバー 『デルムツド』×3

小型ハイブリッドガトリング 『ミヨルニル』×4

ガンダリウム合金製高出力ビームシールド×2

EMPグレネード入りスプリットミサイル×6

シユペール・ラケルタ・ビームサーベル×6

ビームマシンガン×1

他武装一覧：

グリフォンⅢビームブレイド×4 (脚部・投擲)

シャイニングエッジビームブーメランⅡ×2本

グラップルスティンガー改

ツインソードライフル改×2丁

ジンクスIVNGNバズーカ×2丁

GNソードⅣ×2本

補足：アライブの待機状態は虹色に輝くダイヤが嵌め込まれた指輪。

部位は右手の薬指。

二次創作小説原案その1：オリジナル主人公、オリジナルキャラクター及び、追加設定等④

名前：八神マサキ 歳：22

血液型：AB型

身長：189cm

性格：他者に厳しく、自分にも厳しく、『傲慢』や『驕り』を取り去ったかのような若くも実直な心構えを持つ。

しかしその一方で事の察しに鋭く、且つ気遣いに厚い

輝刃に似た側面もある。

『正義とは何か』という事に心の中で迷いが生じており、任務の際若さ故の

操縦技術の不足と敵パイロットの揺さぶりにより度々危機に陥る事が多々あり、

亡国企業の織斑マドカやオータムに怒られたり侮辱されてしまう。メンタル面での成長は凄まじく、『鍛練』や『努力』を得意とする彼の並々ならぬ成長に同調して、操縦技術のみならずここぞという時の

爆発力も伸びしろが凄い。

容姿は冥王計画ゼオライマーの木原マサキ。因みに彼の両眼は

オーデインの瞳になっており、右眼は透き通るようなオレンジ色。

左眼は少し濁った青色になっている。

設定：一人称は特に無し（本人が社交的な為）。前世の世界では輝刃の兄にあたる人物であり、

転生した世界でも同様の立場である。輝刃が事故死した数十年後に病死したが、

数奇な運命を辿り、輝刃と多少誤差があるものの同時期に

同じ世界に転生することとなる。しかも神の悪戯なのか死後、マサキの

転生に携わった神は輝刃を転生させた神と同一人物だったのだ。

神はうつかり口を滑らせ、弟の転生先を喋ってしまった為、即決で転生先を決めある目的を企て、少し時間を置いた後転生した。

ある目的とは『戦争の道具になるI Sに前の世界では、一般人だった

弟を乗せる訳にはいかない。然るべき「手順」を踏んだ後、普通の仲の良い兄弟として生きる。もしこの目的を邪魔する者が立ち塞がるのなら、殺人も辞さない。』という事である。

決して殺人を好んだり、欲しているわけではなく、「目的」に対し不必要な「犠牲」はマサキの本意ではなく可能な限り機体を無力化させたり、強力な衝撃を叩きつけて気絶させている。まさに「神の偶然」で転生することとなり「望んで」「特殊能力を手に入れた輝刃とは違い、前世からこの性格だったマサキは」「あらがえない死」として受け入れ「同じように」「元の

自分のままで生きる事を選んだ。特殊能力を授けられる事を頑なに拒んだ。

しかし、当の輝刃本人は特殊能力と与えられた才能だけではなく、原作開始約5年前（当時15歳）から

素戔鳴が最高司令官を務めるZ E U T Hで新型I Sのテストパイロットだけでなく一般教養から多岐にわたる専門知識を会得しつつ、サバイバル、体術も学んでいる為、戦闘では前述の性格も相まってまともに攻撃を当てる事が出来ないでいる。それに輝刃は現在の転生したI Sの世界の『八神輝刃』という一人の人間として自己完結する事を望んでおり、彼からすれば態々過去の世界から（自分にとって）筋違いな事情を持ち込むマサキに迷惑している。

オリジナル機体：

機体名：パルヴァライザー「Code—No・hope」

機体設定：Z E U T Hの極秘開発計画『メイク・アライブ』

の開発競争で採用されず自分を認めてくれなかった
素戔嗚に対し、憎しみを持ったある研究者がZ E U T Hを
見限り亡国企業に寝返った際に自分の持てる技術の全てを
注ぎ込み、完成させた球体のI S。

正しくは、『球体のI S』ではなく『I Sコアの形を
しているI S』であり物体そのものはゴーレムⅢのコアと
同じ様なサイズである。

このI Sは創世者とはほぼ同じで専用武装及び、
基本武装を一切持たない。

しかしこのI Sは創世者の“創りだす”機能と
対になる云わば“破壊する”機能を備えている。

それは研究者が寝返った際にその時点でZ E U T Hに
蓄積されていた全機密データをレベル順に管理する

スーパーコンピューター『インターネサインΩ』から
理論上籐ノ之束でさえファイヤーウォールを

突破するのに55分掛かる防御網を10分で突破し

I Sに関わるデータのみを全てコピーしてそのデータ
を直接インプットしたのだ。

研究者曰く『生まれながらにして完成されたI S』。

コアのあるI Sをコアごと融合させるか、コアの抜かれたI S
に埋め込む事によって“ I S自身が操縦者の特性を理解する”

という常識を大きく覆し、“勝つべくしてかつ機体と装備を作る”
という

独自の設計思想を持ち、“パイロットの精神状態やコンディション
に関わらず常に限界性能を維持し続ける事が出来る”という

V Tシステム以上に危険な機能を搭載し、此れに
よって将来的に無差別・無価値に増える犠牲を危惧した

素戔嗚は輝刃に当研究者を捜索中に発見次第捕縛、
抵抗するのならば排除を許可している。

補足：パルヴァライザーは常に勝つために考え続けている為

“待機状態” と呼べるものが存在しない。

第一話 新天地にて

121年後1

エイジ『まさか傭兵と一緒に長期任務を遂行するなんてな。アンタらが居れば心強いぜ。叢雲劾《ムラクモ・ガイ》、カナード・パルス』
場所は日本、季節は若々しい春、時は雄大な雲と美しい空が彩る朝、何処かに向かうであろう海近くの車道を走る四人乗りの乗用車の中で、青年は同乗者に話しかける。

ガイ『以前からお前とはペアで仕事をしていたが、どれも相棒（エイジ）が頑張り過ぎて一週間以内に終わっていたからな。大学の軍事教練を1年で卒業して大隊入りしているのは、後にも先にもエイジだけだ。』

幾ら大学きつてのエリートで傭兵業を営んでる俺と息を合わせられる奴でもミスの一つや二つするかもしれないからその時はよろしく頼むというのがスサノオの言い分だ。』

この男、叢雲劾《ムラクモ・ガイ》はIS導入期以前から信頼性の高く米国に活動拠点を置いている民間軍事会社「サーペント・テール」直属の傭兵である。

彼の師匠『ダンテ・ゴルディジャーニ』から倣った洗練された戦闘術や機械工作技術、サバイバル能力は国内外から高く評価がされている。

IS導入からゼウスが本格的に活動を開始していた折、総帥スサノオから直々に合併の話をして現在は通常業務を行う傍ら、依頼された時はある程度優先的に此方の支援に急行して下さいとの事だ。

因みに彼のISは「ガンダムアストレイ：ブルーフレームセカンドリバイ」である。

カナード『フン・態々エイジとガイが出張しなくても俺がシゴいてやれば、直ぐに力をつけるものを。スサノオも間怠っこしい真似をしてくれる。』

ガイの隣で車窓越しに多数のビル群や人工林を見つめながら、別

の同乗者は明らかに面倒事を押し付けられて眉間にしわが寄っている。

背丈は明らかにガイよりも小さく、体の肉付きもどちらかといえばマツシヴ寄りなガイとは違い完全に細身である。しかし過酷な訓練を重ねた結果身につけた強靱な肉体はガイに勝るとも劣らない事が車内中央のカーミラーからも伺えた。

この男、カナード・パルスはガイとは違いアジアに拠点を置き活動しているフリーランスの傭兵である。彼もガイと同じく両親はいない。

元は某国にて行われた超人開発計画で生まれた最高傑作のデザインベビーだが訓練プログラム履行中に自我が生まれ脱走。

研究施設周辺の街を徘徊していたところを総帥スサノオに拾われ、彼から一般教養と処世術を学んだ後何でも屋を起業したが元々研究施設にて高度な戦闘訓練を受けた為、何でも屋で貯蓄した資金を元手に傭兵業に転職した。

彼のISは「ハイペリオンガンダム」である。

『まあまあ、そう眉間にしわ寄せると老けるぜ？それにしても久しぶりに帰るとまあ日本も様変わりしてさあ。女尊男卑つったかな？父さんの友人が造った機械のせいで世の男性は大変お困りな様で・・・』
『俺達がつかっているものも、ほぼ同じもの何だがな・・・』

『一緒にしてもらっちゃ困るぜ。こちとら男女問わず操縦出来るし、性能ダンチだし、何よりアラスカ条約で表向き軍事用と銘打てない国々とは違ってこっちは独立組織だから堂々と言えるからな。』

『エイジの言う通りだガイ。俺も傭兵業に転職する際に、「今までの修行のご褒美だ。よく苦しい訓練に耐えたな、さすが我の一番弟子だ。今のお前ならその力の使い時を見誤ることはないだろう。自分の信念を貫いて行けよ、カナード。」とか言っただけでも誕生日プレゼントと同じ感覚で超兵器をを渡してきたんだぞ。あいつにとって信じられるものは自分が作ったものよりも、自分が作ったものをより大切に扱え

る人間なのだと思うと、人たらしと揶揄されるのも仕方ない。』

カナードの体験に運転手のエイジもカナードの隣に座るガイも

口元に笑みが零れる。

『そろそろだな．．お！あれか！』

『アレが俺達が暫く世話になるところか。』

—— I S 学園校門前 ——

??? 『ようこそ、I S 学園へ．．．君達が此処で【警備員】として配備される事になった人員か。私は織斑千冬へおりむら・ちふゆ。此処で教鞭をとって小娘共を鍛え、国が誇れる人材に育てている教師だ。この場にはいないが助手の役割を務めてくれている、別の教師がいるのだが：恐らく今は自分が担当するクラスを纏めるのに手一杯だろう』
校門で待っていた女性は口調こそ男顔負けの荒々しいものであったが、それとは裏腹に容姿と格好は男性が見れば必ず見惚れるか魅了されるであろう程に、美しく又エロティックなものであった。
出る所は出て、締まる所は締まる。

I S 開発時代から長い間鍛え上げてきた肉体美に女性美をを合わせる様に豊穡の大地が存在し、太陽に照らされる黒い長髪は簡素にポニーテールにまとめ上げられ宛ら日本人の中にあるであろう『大和撫子』のイメージにぴったりだった。

『へえ：貴方があのブリュンヒルデですか．．．』

千冬『．．．』

『あのー．．．千冬さん？』

車を駐車場に停め、学園総合受付を通過して千冬の弟である『織斑一夏へおりむら・いちか』のいる教室に向かって案内されている途中、エイジは彼女からチラ見レベルではあるが向けられている視線が気になり聞いてみる事に決めた。

『私の顔に何か付いています？』

『息子がいると聞いたが：スサノオに似て勇ましく逞しい雰囲気を感じるな。』

『そうですか？たまくに他の大隊から軟弱者とか草食動物って陰口叩かれてますけどね…』

『それはそいつの見識が無いだけだろう。私が保証する。それと、首にかけている装飾品は何だ？眼鏡に見えるが……』

『これは14歳の誕生日に父さんに買ってもらったものです。視力が良過ぎるからこれで調整しているのです。』

『そうか…スサノオの元で働いていると聞いているが、任務の時にも付けているのか？』

『ええ、交渉任務の時ですね。最後の一押しって時にこうやって眼鏡をかけると……』

『ふむふむ。』

『相手を恫喝するのに最適なんですよ。』

千冬『』

千冬は恐怖した。ドイツで一年間教導官として特殊部隊を鍛えていた時には鋭い目つきと寄せ付けない雰囲気を放つ軍人など幾らでも見てきた。そう自負する自身でさえ命の危険を感じるほどの気を放つ男はさつきまで社交的で礼儀正しい青年とは思えない程の変わり様だった。

『驚きました？私が持っているあるアニメのDVDに似た様な事を出来る人がいたので、試しに身につけてみたら結構効果あるんですよ、これ。』

『そうか……』

エイジ『やっぱり怖かったですよね？』

『そんな事は無い！』

『怒った顔も大変お美しゆうございます。ご馳走様です。』

『待て、何故手を合わせて礼を言う。私は今日会ったばかりの貴様に物をあげた憶えは無いぞ。人をからかってそんなに楽しいか！』

『いででで！胸倉を掴まないで下さい！からかうなんてそんな……ただ俺は案内して貰っている時から眉間にシワが寄って美しい顔が台無しになっていると思ったから少しでも柔らかく出来たらって……』

『この顔は元々で、余計なお世話だ！大体……』

『口論は時と場所と都合を選んでしてくれないか。』

『そろそろ職員会議の時間だぞ。良いのか、織斑千冬？』

『ハ！……すまない。取り乱してしまった。謝罪する。』

『いえいえこちらこそ、大変が……』

『(遊び過ぎだぞ、エイジ。)』

『(これ以上は辞めろ。)』

『ゲフンゲフン！えっと、教室はここで？』

『ああ、この教室で合っている。私は……』

『ガイと呼んでくれ。』

『カナードで構わない。』

『解った。二人は職員会議に同行してもらおう。(それにしても此処だけやけに静か過ぎるな……もうHR始まったもおかしくない時間なの……)』

『んじゃ、失礼しま……』

エイジが教室の扉に手を掛けて中に入ろうとしたその時だった。

後部の扉が開き何やら慌てた様子でIS学園の制服を来た少年が血相を変えて出てきたのだ。

???'『早く他の先生を呼んで止めないと……って千冬姉!?!?』

『一夏!?!HRを放っぽり出して何をしている!』

『へえく君が千冬さんの弟か。』

一夏『千冬姉?この人達は……』

『馬鹿者。学園では織斑先生と呼べ。この三人は今日から此処で働く事になっている警備員だ。それより何があった?』

『そうだった!大変何だ織斑先生!山田先生が……』

『山田に何かあったのか?』

『山田先生がHRの点呼をとった瞬間外から何かが窓ガラスを割って教室に突っ込んできて、山田先生に襲いかかってきたんです!というか……束さんが帰って来たんです!』

『何!?!』

エイジ『(父さんの友人が?!このタイミングで何故?)』

『(作戦通りだ。俺がオフエンスで……)』

『(解っている、デイフェンスには俺がつく。)』

千冬は世界中から指名手配を受けている親友の突然の来訪に驚き、エイジは自分が所属している組織が創られたきっかけになった人が突然来たとなれば話を聞くしかないと心に決める事にした。

傭兵コンビはスサノオから束縛の任務を預かっている為其々のISから対人用の麻酔弾が装填されたSMGや特殊警棒にアサルトシールドを展開し装備。

一夏はいきなり武装する二人を見て慌てて後ろに下がり四人の後方に退避。

反応は様々だが今満場一致で解ることはこの扉を開けて中に入ることのみであった。

『失礼します！大丈夫です！……か……』

『山田先生！……な!?!』

『どういう……事だ……』

四人が見た光景とは……

山田『ひゃあ！これ以上胸を触るのはやめてくださいあい！限界が……』

東(?)『何の限界かなあ？おっぱい星人ちゃん。ドンドン身体中が熱くなつていくのが手に取るように分かるよお。このまま生徒の前で○○○○顔を晒して○○○○なよお。そんでもって私の○○○になればこの快楽を君だけが独占できるの。どう？悪い話じゃないでしょ?』

『いきなり教室に入ってきて胸を揉みしだく変質者の要求をどうして聞き入れる必要があるんですか!?!それに未成年の生徒の皆の前でその様な卑猥極まりない発言は控えて下さい！それに私はへおっぱい星人』

『い、意外にガード固いなあ……もう少し外堀を埋めてから……』

千冬『束！此処で何をしている!?!』

『ちーちゃん！おひさ〜★』

青少年が神様から特典を貰い転生したIS世界。

21年の間に様々な人と絆を結び、世界を変える力と志を身につけ、

本筋の物語に介入したエイジ。

その先に待つの希望か、絶望か、それとも……

第二話 この羊は狡猾に非ず／その名はΣへシグマ 前編

—— I S 学園 1 学年教室 ——

『久しぶり……と言いたかったが、一撃叩く必要がある様だな。私のいる学園で淫行をする輩には挨拶の前に然るべき制裁を加える必要が……拘束を解け。』

『眼が怖いよちーちゃん』

東はすぐさま山田から離れ、千冬から距離を取る。

『織斑先生!?!?今、この方の事を束と……もしかして!?!?』

『そうだ、山田。こいつが I S の生みの親で全世界から指名手配を受けている腐れ縁だ。』

『へ腐れ縁』とは酷い言い草だね、ちーちゃん。』

山田は心身共に驚愕していた。それもそうだろう。さっきまで強姦紛いの行為に及んでいた女性が、世界に一石を投じた人物なのだから。

天才ならぬ【天災】の人を前に山田の確固たる理性と燃え上がる怒りは瓦解し、挨拶をしようか、それとも矢張り怒った方がいいだろうか対応に迷っているのだ。

『(ど、どうすれば……!-)』

『ねえ、ちよつといいかな?』

『はひい!』

『はああ……ホント君は可愛いなあ?!』ゴチン!

東の頭上から明らかに激痛を伴う音が響いた。

千冬が拳骨を放ったのだ。

『いったあゝい!何をするのさ、ちーちゃん!』

『謝れ』

『あ?』

『謝れ、と言ったが聞こえなかったのか?』

千冬の鬼神の如き気に気圧されて“流石にやり過ぎた”と確信し

た束は、山田の方に向き直り

『すいませんでしたあ!』

縦方向にほぼ90度に身体を曲げた。謝罪である。

二人の教師と一人の天才の会話を聞きながらエイジは奇妙な違和感を抱いていた。父親から聞いた背格好と寸分変わらず其処に束はいるのに『この女は偽物である』という本能的な感覚ではあるが信じるに足る実感があつた。

脳は『その女性こそ自身が会いたがつていた人物である事に間違いは無い』との判断が下されているので、ちぐはぐになっているのだ。

『それにしても、これはどういう事だ。』

『ほえ?』

『何故、クラスの全員が眠っているのだ?これもお前の作業か?』

『無理して入って来たから、パニックになる寸前だったの。騒ぐ前にこれを使って全員眠らせたのさ。いっくんは席の位置からガラスに当たりそうで速攻で回避したし、私がボタンを押した頃には口をハンカチで押さええて教室の隅っこまで行つてたから吸わなかつたのかもね。』

束はポケットの中から丸い形状をした野球ボールサイズの物体を取り出す。

『私が昔作つて研究所の倉庫に放り込んだ特製無音催眠ボールなのだ。』

『起こせるか?これから授業を始める予定なのだが…』

『天才に不可能は無いのさ。ほいッ』

束がもう一度ボールに設置されているボタンを押したら5秒後に変化が現れた。ボールから二つの穴が開き其処からガスが噴出したのだ。

『本当に大丈夫か!?』

『起こす方』のガスだから心配要らないよ。』

セシリア『うう…一体何が…』

束曰く『起こす方のガス』の効果により睡眠状態にあつた生徒達

が一斉に起き出した。本当に起こす効果しかなかったらしい。

『いや、ちーちゃんといつくんに久し振りに会う事に決めたら、私つたら急に張り切っちゃってさ。ゴミ屋敷みたいな倉庫をクロちゃんと一緒に掃除して《ガスボール》を引っ張り出してサプライズの為に使ってみたのです!』

『此処に来るのなら連絡ぐらいしろ!そのガスボールとやら、明らかに本来の用途と逸脱しているのが解らんのか?』

『ちーちゃんは驚いてるようだけど、これ使えるの一回切りなんだよね。だから束ちゃんの見識的にはポンコツ扱いだから捨てたのだよ……?そこのサングラスの人と小さいけど鮮やかな長髪が光るイケメンは、束ちゃんに所用ありって感じだね』

『篠ノ之束、ここで捕らえる。スサノオの命でな。』

『動くなよ?絶対にな……』

盾を束に向けて前面に構えつつ、収納状態にあった警棒を慣れた手つきで勢いよく延伸させ間合いを測るカナード。

その背後には銃身下部に銃剣を付けたサブマシンガンをセミオート状態にして、制圧出来る構えに入っているガイ。

《二人》はいつでも戦える状態にあった。

しかし、この男は。このエイジだけは、二人と同じ様に警戒する姿勢では《精神》だけは同じものであった。が、彼にとっての警戒心は全く別の所にあった。

『あんた……誰だ?』

『エイジ?……何を言っている?既に察しもついているだろうに。この女は篠ノ之束。私のくされえ……』

『いいや違うね。この人は篠ノ之束ではない。』

『ほう……だったら私が天才束ちゃんではない理由を教えて貰おうか。この糞餓鬼。』

束は心底怒りを露わにした。それは当然だろう。何処の馬の骨とも知らぬ奴に《偽物である》と言われたのだ。自身を《世界最高の科学者》と言って憚らない彼女でなくとも怒るのは当然。本来なら半

殺しにする所だが、それは低脳な一般人のやる行動。怒りを収め、話を聞いてからブチのめす事に決めた束は右腕の握り拳をそのままに聞く。

『先ずひとつに、貴女が警戒したのは武器を持っているガイとカナードだけだった。』

『それは当然じゃない？ 束ちゃんが捕まるなんて事はあり得ないけど、脅威度は武器を持っていない君よりも警戒するのは…』

『私は父から貴女の背格好とへ狡猾な羊」という意味不明な二つ名しか聴いてないので、正直言つて性格的特徴なんて解りません。ですが、先程からの言動や行動を観察して一つの結論を立てました。』

『へえ〜どんな？』

『恐らく貴女は私が警戒する事はしても、殺意は持たない事を知っていた。であれば、殺そうとしないものに気を向けないのは当然の帰結。篠ノ之束を完全に〈模倣〉する為に編纂した資料を用いて私以外の面々には本物と変わらない体面は出来た様ですが、所詮は上っ面。今になってやっと解りました。思うに本物の篠ノ之束は…興味の無い事には無関心！それは、人間に対しても変わらない筈！しかし今の貴女は…本物に比べて社交的過ぎる！』

某大気探偵漫画での外的な推理を連発するちびっこ探偵の保護者並の無茶な推理を展開したエイジは、束らしき人物の反応を伺う。

その間に目覚めた生徒達の精神は所謂ポルナレフ状態だった。

『（これから授業が始まるかと思つたらウサミミが空からガラスを割つて入ってきて、突然眠らされた。起きたらあの千冬様と服ごと揉まれたようでへたり込んでる担任とウサミミをつけた美女と見知らぬ男3人が立っていた。何を言っているのか解らないが、私達も頭がどうにかなりそうだった。催眠術とか超スピードとかチャチなものじゃあない。もつと恐ろしいものの片鱗を感じました……』

『ククク…フツツ…ふふふ…くつくつく…あつははは！アアはははははは！アヒイ！イヒイ！イヒイ！』

『!??! (笑つた！なら、本物なのか?)』

『束…一体どうしたというのだ?』

狂ったように笑う親友を心配する千冬と、疑念を言葉に変えて投げうち反応を伺うエイジ。束から殺意を感じられなくなったカナードとガイは携行していた武器を待機状態のISに収める。

『まさか…この女は…』

『ああ。恐らくあいつがお守りの為に贈った…』

『ガイ?カナード?何を言ってる…』

正体を知っているような口ぶりにエイジは二人を問いただそうとした。だが、急に笑い声が止んだ。束に化けた人物が腹部をさすりながら呼吸をしている。

??? 『擬態率は100%なのに、目を合わせた瞬間からバレてしまうなんて。流石は私の【先輩】です。』

『せ…先輩?!何を言っているんだ?それに擬態って…』

『見破られたからにはしょうがない。見せて差し上げましょう。私の完璧にして至高の姿を…擬態、解除。』

束らしき人物の両手の指の皮膚が剥がれ落ち始めた。ウサミミを付けた紫色の頭髮は徐々にその色素を変化させ金髪になり、ウサミミは獅子の耳を象った装飾品と姿を変える。それだけではない。服装も軍服に“戻った”のだ。

アルトリア『私は【エンキロイド】。コードネームは【アルトリア】。貴方の【エンキドゥ細胞】から得られた遺伝子情報を元に造られた《人造人間》なのです。』

入学1日目から波乱の日々が幕を開けた!

束を騙り、自らを人造人間と名乗った謎の美女の正体とは?

事態についていけない生徒達に明日はあるのか!?

第三話 この羊は狡猾に非ず／その名はΣ（ヘシグマ） 後編

『な!?!……俺の細胞で……だと☒じゃあ今のも?』

『いいえ。これは遺伝子操作の段階でウエスカー様に施された特殊能力です。後天的にエルキドウを投与されて強化人間になった貴方とは違い、私はより戦闘能力を強化されています。』

『マジかよ……。で、アルトリアは何の用でここに来たのかな?』

『中々の適応力、流石ですね。もつと疑って掛かると思いましたが擬態を観て信用する気にはなったようですね。』

……貴方に専用ISを届けに参りました。《メイク・アライブ計画》筆頭重要事項である《ツインコア・ドライヴシステム》を搭載した、《ガンダムタイプIS》を。』

『~~ああああああ~~エエエエ!?!』

『ガン……ダム?』

千冬はガンダムという名に聞き覚えのある様で思い出そうとしている。エイジはそのISが何であるかを知っている様で驚愕している。

『信じられないんですけど……Gフレームを使うISは大隊長のみの特権ですよね?』

『語弊がありますが……概ね、その通りです。』

『世界最強の通り名にして、たった一機で大国一つを滅ぼせるとされるあれを?』

『はい。あれです。』

『マジで?』

『マジです。』

『なんでなん?』

『《天国の世紀》に於ける貴方の功績は、当時の新兵の中でも飛び抜けて優秀で御座いました。戦果は大隊長と比肩できる程の力を持つエ

イジ様は直ぐに議会の話題に挙がり満場一致で専用機の開発が決定致しました。フリット様とアセム様は不満があるようでしたが、キラ様とアムロ様とシャ：キヤスバル様は認めていましたし。』

『フリットさんとアセムさんはうちと比べてちよいと過保護というか、なまじガチガチの軍人なもんだから息子さんのキオが入隊するのを拒んでたからな。伝え方が不器用だから反発して来ちやった事を思い出して反対したんだろうよ。』

『(まさか：奴の話は：眉唾物ではなく…)』

『……あのくすいません。』

復活した山田が立ち上がりながら、挙手をして呼び掛ける。

考え事をしていた千冬も一旦思考を止め、苛められていた後輩に声をかける。

『山田先生。大丈夫ですか?』

『織斑先生。不躱ながら申し上げますが：その：時間が』

『あ。』

千冬は電子黒板が設置されている電子時計を確認した。

『ドアアアアアアア!』

本来なら平和に終わる筈だったHRは、腐れ縁に変装していた来訪者によって滅茶苦茶になり玄田○章並みにに吼えながら、崩されたスケジュールを脳内で再構築するのであった。

—————IS学園廊下—————

エイジとアルトリアは一悶着の後、自己紹介を終えたらそそくさと教室から出て行き、ISを受け取りに廊下を歩いているところである。

カナードと効は千冬から教員室の場所だけを聞いて今頃は自己紹介をしているだろう。

ゼウスの事を余り知らない1年生徒は、ISが使えない男性を警備員として置くなどありえない事であるとの意見も多数寄せられ

たが、アルトリアがIS学園の理事長と契約書を作成して問題は無いとの事。

治外法権であるIS学園だからこそできるが、こんな事は男子高に女子高校生を転入させようとする位奇妙な荒業である。

だが、治外法権であるが故に本国の警察組織や司法が介入出来ないのも足枷になっている。

三に：四人が来たのも素戔嗚が理事長と交友関係にあり、IS学園の設立に関わった素戔嗚の理由としては優秀な人材に傷が入るのは嫌だし、彼にとつて無辜の民に等しい少女が傷つくのは良心が痛むというのが本音だ。

二つ目としてはこれからISに深く関わっていく若人に自分達の手を見せつけて、陣営に加えるのも良いとも考えたのだ。

『ねー、アルトリア。』

『何でしょうか?』

『当のISは何処で整備中?』

『ここの整備用ハンガーを借りて調整です。』

『完成度は?』

『90%に達しております。』

『いいねー、造り始めたのはいつ?』

『1年前からだそうです。』

『アルトリアは開発に携わってないの?』

『任命されたのは運搬担当の方で：議会も直接参加したわけじゃないんですよ。』

『素体は?』

『リボーンズガンダムです。』

『ダブルオーライザーは?』

『あの機体はソラン様が乗機としていたエクシアの後継機にあたります。故に、近接戦闘を主体とした武装に重きを置いているのでバランス型のエイジ様のスタイルに合わないのですよ。リボーンズなら機動戦形態のガンダムモードと、砲撃戦形態のキャノンモードできつちりカバーが出来ます。ツインコアシステムのお陰でファングの出力

も向上し、両肘で露出気味だった太陽炉を覆い隠すように1基ずつ増設いたしました。』

『もしかしてそれでバリアなんか張れちゃったりして…』

『はい。アレルヤ様のハルートを搭載されているシザービットを参考にして、鋏の攻撃的構造をバリアの防御機能に発展させました。他のファングも同じ様に改修した様なので、試運転の折には是非確認する事を勧めます。』

『名付けるなら、『フィンファング・バリア』かな?』

『ご自由にどうぞ。』

長話をしながら階段を下りたり廊下を曲がったりして5分後に、整備用ハンガー前に着いた。扉に内蔵されているセンサーが二人を感じて自動的に開かれる。

『これが【ターンΣ（シグマ）】。エイジ様の専用機でございます。』

『おお…中々グレートな仕上がりがりじゃあないか。』

二人の目の前に直立不動の体勢で鎮座していたのは全長5〜6M程度の二足人型で頭頂部に鋭いV字型のアンテナを着けた鋼鉄の塊だった。

両腕部・両足部・胸部等には、未だ調整中であるかを表すかの如く装甲に内蔵している精密機械にケーブル状の物体が接続されており、元を辿れば大型コンソールが設置されていた。

『さて、こいつのステータスを確認してみま…てありい!?!』

ハンガーに足を踏み入れたエイジは、自分の身体がみるみるうちに逆さまになっていくのに気づいた。

『アルトリアさん。もしかしてこれは…』

『シグマの出力調整は終了していますが、反応速度の調整作業に入っているので低出力ではありますがドライヴを起動させて装甲とフレームの摩擦係数を下げています。』

『ドライヴを回してるってことは…』

対照的にアルトリアはしっかりと地面に足をつけており、何ら慌てている様子は無く平然としている。

『反重力が発生し無重力状態になっています。AMBACを使う訓練

は大学校で受講された筈ですよね?』

『おつとと:低出力でこれか。範囲は?』

『このハンガー内のみに残まっております。』

『パーセント的には幾つ?』

『4〜5%であります。』

『10%もいってないのか:こりや全開でぶん回したら凄い事になりそうだな。』

《《《型式番号:TC D-01ターソンΣ

素体:リボーンズガンダム

《《《機体全長:4.6m

《《《機体重量:5.6t (フィン・ファングII非装備時)

6.8

t (フィン・ファングII装備時)

《《《動力源:第5世代型太陽炉【カルナ】×2

ミノフスキー

ドライブエンジン×1

《《《搭載システム:ツインコアドライブシステム

トランザムシステム

量子化

《《《防御装備:GNフィールド

GN

ビームシールド

I F 発

生装置 (超小型)

《《《機体武装:大型GNバスターライフル×2

大型G

Nビームサーベル×4

フィン・

ファングII×6

Nフアング×20

小型G

ナーウィップⅡ×2

エグ

e t c

『機体の基本コンセプトは崩さずに、正当な発展系として製造されたようですね。あ、珈琲を淹れますがどうします？』

アルトリアが左手の薬指に通している白百合の様に美しいダイヤモンドをコンソール近くに向けてかざすと、指輪が強い光を放ち粒子が放出された。

水色の粒子は最初は散らばっていたが、少しずつ収束されていき元々の物質に還元され其処には丸型のスモールサイズのダイニングテーブルと砂糖・ミルクの瓶と珈琲ミルと湯沸しポットがそれぞれ一つずつと簡素な珈琲カップ、ホイール付き椅子・珈琲豆が入った袋が其々二つずつ出現した。

『何処もかしこも金と資材の気合の入れようが違うぜ。まあ、素体がGフレームならこれも必然か。じゃあ、ミルクと砂糖アリアリでな。比率は6：2：2で頼むぜ。（一から挽くのか、本格的だな）』

アルトリアは慣れた手つきで珈琲ミルに二人分の豆をセットし一部の淀みも無く5〜6分後には豆は細かい粒子状になった。

目分量ながら均等に挽いた豆をカップに入れ、予め熱湯で準備しているポットを動かし注いでいく。適量に達したと判断したアルトリアはポットを元の場所に置きつつエイジとも会話に興じる。

『私はエンキドゥによる戦闘能力だけでなく、凡ゆる状況に即応可能な新世代の人造生命であります。そこいらの凡骨とは頭の作りも使い方も比較にならない程に洗練され、より効率的に、より効果的に活

動する事を義務付けられています。(しまった。マドラーを出し忘れてしまった。)」

アルトリアは今度はテーブルに向けて指輪をかざした。今度は金属製のマドラーらしき物体が出現した。まだ完全に混ぜていない珈琲にアルトリアはマドラーを入れ、丁寧にかき混ぜ3分後には2人前の珈琲が出来上がった。エイジの珈琲には注文通り、ミルクと砂糖を多めに混ぜ入れエイジの手が届く距離に置き自身はブラック珈琲を飲み始めた。

『相当自身の有る奴じゃなきゃそんな発言は出来ないな。あー…て事はさ？グラビアアイドル顔負けの美女フェイスと豊満な肉体にも理由があるのかね？(ズズズズ…あく美味しいじゃあないか。そういや珈琲の上手な淹れ方は学校の家庭科じゃ習わなかったな。暇が出来たら聞いてみるか。)』

専用機の情報閲覧が完了し、アルトリアが用意した椅子に移動したエイジは珈琲を飲みながらアルトリアに「自分が造られた理由」について質問を行なった。

『貴方の行動をえん…』
『そんなもん聞かんでも解るさ。俺が聞いているのはそれ以外のことだよ。』

『それ以外？？そうですか…簡単に言えばあらゆる手段を行使して貴方を繋ぎ止める事です。』
『はあ!?何じゃそりゃ!?俺が裏切るとでも上層部は考えてんのか!?冗談でも笑えねえぜー!』

『これは上層部の意志ではありません。』
『じゃあ誰の…』
『ウエスカー様であります。』
『やっぱりあいつか…』

珈琲を飲み終えたエイジは怒りを露わにした。自分の父親がトップを務め母親も参謀の席に就いている組織に、自分の意思で入隊を強く打診したのだ。両親の期待に応える意味としても、トップとナンバー2から信頼を寄せられている若きエースとしても、エイジは裏切れないし裏切りたくないのである。

当然のように其処には打算など存在しない。ウエスカアの此方に対する不信を表したアルトリアの発言にエイジは怒りと困惑が入り混じった表情を浮かべた。

『エイジ様はエンキドウの貴重な被験体であります。確実に貴重なデータを得る為に私が性的な奉仕を行って？ぎ止める役割も担っております。』

『あのさあ…そんなあからさまな発言聞いてさ、これから奉仕をする時に勃つと本気で思ってたの？』

『あ…私にカマをかけたね。』

『掛けてないよ。オブラートに包む伝え方ってモンがあつたらうが。そういうことだ。』

『どんなに言い繕ろうと致す時が来れば解ります。手っ取り早くその分の時間を省いたまです。』

『ハア…（俺のパートナーがこんな変態なんだかストレートなんだか分からん奴だなんて…先が思いやられるぜ）』

アルトリアと口論しつつエイジは特製珈琲を啜る。

『話は戻りますが、シグマは既に実戦に投入できるレベルにあります。確かIS学園ではこのシーズン、クラス代表決定戦がごございます。』

『（切り替え早いな…全く気にしてないって感じだ…）そうか、適当に他のクラスの代表戦にエキストラとして入れて貰って試験運用をするプランで行くか。』

『畏まりました。それともう一件…』

『ん？もう一つ？』

『ええ、これから行なう戦闘の相手に織斑一夏がいる一年のクラスを選んで重点的に戦うのはどうでしょう?』

『何でさ?これから“選別”をして素質を調べる前段階なら、三年を重点的に予定をセッティングして戦うのが定石じゃないか?』

『天財族(てんざいぞく)』

『う…』

天財族——その言葉を聞いた瞬間、エイジの表情は苦虫を噛み潰したような顔になった

『彼らからの援助によって我々は充分過ぎるほどに、組織運営は賄われています。他の多国籍企業からの援助資金や資材では【月基地】や【ガンディーヴァ】を建造するのに本来なら最速で二百年はかかる所を十年ほどで建造し、安定した拠点運営も行われています。それが出来ているのは貴方の父君が彼らの要望に応えているからこそなのは、お解りですね?』

『釘を刺すように言伝を頼んだのは誰だ?』

『いいえ。誰からも頼まれてはおりません。』

『なに?』

『これは貴方の出自と置かれている状況を判断しての忠告でございます。』

『俺は実力で学校を抜けた。』

『実力は関係ありません。貴方が天財族に名を連ねる血族である以上、要望に応える義務があるのではないかと思ひまして…』

『やれやれ…俺を怒らせるな。』

《天財族》——この地球上において、戦争・経済・医療・福祉・政治など、世界の成長と維持を司るあらゆる要素を裏から支配する伝説の部族である。

彼らの特徴といえれば分かり易いものが5つ

1つ——とても長生きし、

2つ——滅多に病気に罹らないような丈夫な身体を持ち、

3つ——身体を扱う戦いと頭を扱う知能戦に滅法強く、
4つ——その部族の血や体液を啜ったものは〈分家〉と呼ばれる存在に昇華し、天財族の〈本家〉には劣るものの恵まれた体格と頭脳を手に入れることができる。

最後の5つ——それ故に霊長類の中で最も繁殖力がズバ抜けて高い。

正に絵に描いたような人間が思う理想を内包するこの部族は名前はそのまま、種族と言つても遜色無いほどに個体数が多い。

エイジは9割〈本家〉の1割〈分家〉の割合で血を引いており、母親——八神玉藻——本姓、『殺神玉藻〈あやかみたまも〉——に、結婚を申し出たスサノオがいる八神家が一番最初に〈分家〉になった家系であり、本家である〈殺神家〉でもエイジの能力を信頼しているものは多いとか。

『俺は自分の意志で赴く。誰に言われるまでもなく、自分が行きたいから行く。俺のやる事にお前も含めて文句は言わせない。』

調整器具の入力装置にケーブルを排出するコマンドを入力した。

数秒後にターンΣは粒子に変換され待機状態に移行。腕輪に再変換されエイジの手元にゆっくり収まった。

『行くぞ、アルトリア。初戦は「ブルー・ティアーズ」と「白式」だ。完勝になるだろうが、油断はしないつもりだ。』

『(やれやれ：父君を見習って欲しいものです) 畏まりました。』

機材を片付けたアルトリアは先に教室に向かったエイジに追いつくために、足早に整備用ハンガーを去っていった。

遂に登場した専用機！一体どれほどの性能を発揮するのだろうか！

やっと始まる(始まったらいいなあ) 戦闘！(とは名ばかりのインターミッション)

自由に戦いたいエイジをどうしようもなく悩ませる天財族の影…

次話、乞うご期待！（してくれたらいいなあ）

第四話 篠ノ之箒、理解者（兼相談相手）を手に入れ 良いスタートを迎える

—— I S 学園 I - A 教室 ——

『（ハア：誰かこの状況を助けてくれ…）』

そう心の中で助けを求めつつ、溜息をついているのは原作主人公。作品を知っている読者なら時に『ワンサマー』と略される事が多いハーレム系主人公『織斑一夏（おりむらいちか）』である。

この小説の作者は変換する際に“いちか”ではなく“ひとなつ”と打って変換するのが癖なのである。

『（高校受験の会場を間違えて、この学園が管理している試験用 I S 「打鉄」に触れて起動出来たら、エスカレーター形式で話がトントン拍子で進んで気付いたら此処にいる…取り敢えず成るように頑張るしかないってことしかわからないぜ）』

心を決めた一夏は鞆の中から教科書を取り出し、次の授業に向けて内容を少しでも読み込んでおく事にした。

原作では「電話帳と間違えて捨てた」という珍事により、一週間で覚えなければならなくなるがこの物語は2次創作。原作と同じ展開になるとは限らないのが現実である

『（うわあ：I S ってこんなな。パーツが多いのか。ゲームで色々出鱈目な挙動があるけど、現実で再現するにはこれだけ複雑に造らないと出来ないって寸法か…その割にスーツはどれも露出度が高くないか？競泳水着とかスクール水着に近いぞ。率直に言つて男の下半身の健康に悪いな。）』

授業で出題される可能性が高い内容はしっかり読み通し、それ以外の部分は斜め読みにして勉強を続行する。

当然だが、一夏はこの学園の誰よりも弱い。最弱といっても差し支えないだろう。これも当然だが、一夏は I S の基礎知識については一般男性とほぼ同等であると断言してもよい。I S に死ぬまで触れる

事は無い男性が突然使える様になったのだから予習など出来るはずもない。

……しかしIS適性のある女性は早くも中学からISの専門的知識について勉強を始める。優秀な素質を持つパイロット候補ならば量産型ISが開発中の試作ISを充てがわれ操縦技術の修練作業に突入するだろう。

イギリスの代表候補生『セシリア・オルコット』やフランスの代表候補生『シャルロット・デュノア』の様に豊富な財源を持っていたり既にコア以外のIS関連のパーツを自社製造出来る機関を持つている人間以外に優秀な素質を持つ金の卵は様々なサービスマサポートを提供する代わりにスカウトを積極的に行う。

……であるが、世界最強のIS乗りである千冬の弟であるにも関わらず平凡な能力しか持たずこれといったコネも無い一夏は“一般的に”スカウトする側からすれば路傍の石ころに等しい、見向きもされないど素人なのだ。話題性だけでスカウトしてくれる程世界は甘くなく、ちゃんと冷静に出来ているのだ。

『(装甲をある程度薄くして機動力や加速力を重点に置きつつ汎用性が高い《ラファール・リヴァイブ》。逆に速度系統の性能を下げた代わりに再生能力を付属した鎧甲冑を装備し、近接武装が多く近距離での戦闘を得意とする《打鉄》……)』

『一夏……』

教科書を熱心に黙読している一夏に声をかけたのは一夏と同じく今年入学した新入生の一人であり、一夏の“ファースト”幼馴染『篠ノ之箒(しのののほうき)』である。

『箒！久しぶりだな！』

『ああ、何年振りだ？』

『6年位かな？箒もこの学園に？』

『一夏には伝えていなかったが、私にも素質が有ったのでな。荷物を纏めて此処に入学したという訳さ。IS学園には通常の体育館の他に、トレーニングジムや道場も置いている。未だ1時限目まで時間が

ある。屋上でゆっくり話でもしないか?…』

『へい!今回の新入生に篠ノ之姓の方が一人いると聞いたんだけど…』

一夏と箒の会話に割って入ったのは警備員??エイジである。

丁度機体のセッティングが終わり、警備員として学園内を巡回する為に仕事に戻ってきたエイジは効からデータ転送された新入生の名前リストに篠ノ之姓を名乗っている女性がいた為捜しているところであった。

急いでいたので顔写真を見ていなかったのはうっかりミスである。(アルトリアは自身の専用機受領の為、既にIS学園を出て量産型IS〈シンクスIV〉を呼出して本部に帰投している)

『篠ノ之は私ですが、何か御用でも?それに貴方はもしかして:…』

『はじめまして。本日から此処でしかない警備員をやる事になりました。八神輝刃と申します。』

『一夏はともかく他にも2人の男性警備員がいるとHRで言っていました。どちらに?』

『私は貴女達には迷惑がかからない範囲で自由に動き回るスタイルですが、ガイとカナードは職務には忠実なタイプですね。今頃人気の少ないアリーナにでも向かっていると思いますよ。』

友好の証として握手をした後、二人の所在をスムーズに伝えたエイジ。年上である事は確実と分かっているとはいえ、かなり大人な対応をしたエイジを多少信用した箒は単刀直入に何う事にした。

『姉に何か所用があるのですか?』

『いや。寧ろ君に用がある。』

『私に、ですか?』

『個人的な期待という奴さ。あの兎の妹がどれ程の素質を秘めているのかってね。』

『余り期待はしない方が良いでしょう?私と家族は姉のせいで人生を滅茶苦茶にされたのですから。恨んでいると思っても構いません。』

“恨んでいる”——その言葉を聞いたエイジは彼女の顔を窺ったが——

『嘘だな。』

『え……』

『どういう事なんだ？ 箒？』

『君はお姉さんの事を恨んでなんかいない。寧ろ心配しているんだ。』
心配している？ いつも飄々としてて掴み処のない姉が血縁者とは
いえ自分以外を本心から心配する事があったのか？

混乱している箒を余所に一夏は聞いた。

『そうなんですか？』

『ええ。私の父は箒さんのお姉さんとは昔、親密な関係がありました
ね。父は昔話を話してくれていたんですよ。』

『姉さんに気に入られて且つ、波長を合わせてコミュニケーションが
取れる男性がいたなんて……』

『《新しいアイデアを思いついた時の彼女の顔は向日葵のようで朗ら
かで明るく、日々の疲労を癒してくれていた》や《過労で倒れた時に
ベッドまで担いで寝かせた時に》ほーちゃん、かあさん、とうさん、ご
めんね…ごめんね…と涙を流しながら寝言を呟いていた』という話
を聞きました。』

箒は姉の思わぬ一面に驚きを隠せないでいる様子だ。罪悪感など
塵のように捨てたと思っていた姉が、実は自分の行いで大切や人たちが
傷ついている事を悔やんでいたなんて全く知らなかったのだ。

『有難うございます！』

『ほえ？ 俺何か礼を言われるような事した？』

『私に姉の事を伝えてくれたじゃないですか！ 確かに貴方の仰る通
り、私は姉さんの事を恨んでいませんでした。掴み処のない姉でした
が、それでも大切な家族で尊敬できる人に変わりはありませんでし
た。戸惑いましたが、私が恨んでいたのは……』

『自分自身、だろ？ 大切な家族を恨み続ける苦しみに苛まれた君は、姉
を恨んだ自分自身を恨む、というより責めるかな？ そうする事によつ
て精神を安定させてきた。違うかな？』

『……たった数分で私の事を理解してしまうなんて、凄いですね。』

『戦友から相談を受けている内に、プロファイラー何て呼ばれ始めて

しまいましてね。こんなのは、ほんの人助けみたいなものです。』

胸のつかえを取り除いてくれたエイジに感謝した箒は、深々と感謝の礼を送った後握手を行った。

『いやー、人助けは本心でやったとはいえこんな美少女に感謝されるなんて思わぬ役得！勤務初日から幸運を拾えたぜ！』

『(凄い…) あの、すいません。年齢を伺っても宜しいでしょうか？』

『二十歳ですけど、何か聞きたい事でも？』

『いいえ…(マジか！二十歳でここまで打ち解けるなんて一種の才能だぞ！俺もこの人みたいに頼りがいのある立派な男になりたいなあ…)』

興奮冷めやらぬ状況下でエイジは本題を切り出そうとしていた。

『箒さん。話変わるけどいいかな？』

『はい。何でしょうか？』

『IS学園では入学式のシーズンに、クラス代表決定戦という行事が開催されるという話を聞いたのですが…』

『はい、HPを見たのですがちょうどこの時期だと思います。今週中に担任から通達があるのではないでしょうか？』

『なるほど、有難うございます。』

『え!?箒、今の話本当なのか!?!』

一夏が驚くのは当然の事である。ついこの間まで一生関わる事が無かったISが急に使えるようになり、突然女の園に入学することが決まったのだから、不足している知識を少しでも埋めようとさっきまで勉強に集中していたので学園行事までは気にする余裕が無かったのだ。

『HPに掲載されているぞ?このIS学園は学生寮が敷地内に建設されていて、自室にはデスクトップパソコンがあるそうだ。今日の授業が終わったら、一夏にも自室が割り当てられる筈だから、後で確認しておけよ?』

『お、おお…(俺だけ置いてけぼりだな…)』

『でさでさ、クラス代表戦では自薦他薦問わずに立候補が行われると私は思っている訳ですよ。そこで現時点で選ばれる可能性がある生

徒は、箒さんと一夏君と：其処の美少女金髪ドリルちゃんだと考えたんですよ。』

【この美少女金髪ドリルちゃん】？奇妙なあだ名をつけたなど感じた一夏と箒。そう呼びながらエイジが指さしたのは、廊下側二列目の6席の後方席で他の生徒達と椅子に座った状態で話しているベリローグの女性だった。

『あの女の子が、ですか？』

『おいおいおいおい、仕方ないとは思っていたがやっぱりそうか：彼女こそイギリス代表候補性のセシリア・オルコットなんだぜ？』

『え!?! そうなんですか!?!』

『本当さ。専用機だつて持っている。稼働時間は軽く二百時間越えは確定していると思うよ？』

『さつき教科書を読んでいた時に、ISには稼働時間が長くなるほど性能が向上して、最終的には形状が変化してパワーアップする事もあるって書いてありましたか：』

『第二形態移行《セカンドシフト》の事だな。あれを出来る連中は将来的に頭一つ抜きんでた能力を持っているが、セシリア嬢はまだまだこれからだな。』

《ブルー・ティアーズ》自体がイギリスにとつての《イグニッション・プラン》のファーストマシンだから、今の段階でそれが見たいって思うのは酷なもんよ。』

『《イグニッション・プラン》？』

『これから学ぶ事になる箒さんと勉強不足の一夏君の予習の為に、簡単に教えてあげよう。イグニッション・プランとは：』

『欧州連合が主導して行っている、次期主力ISの開発を主軸とする統合防衛計画の事ですわ。』

『そーそー代わりに教えてくれてありがと：て、え？』

ちよつとした教師気分になり有頂天になっていたエイジは、後ろから説明してくれた女性に気づかなかつたようだ。

黄金《こがね》色に輝く頭髪を手で流しながら語った女性生徒は、しかし長身のエイジに隠れて一夏と箒からは自分の体が見えなかつた

為、エイジの隣に移動する事にした。

『すまないね。家族が丹精込めて作ってくれた料理を食べ続けていたら、鰻登りに伸びちゃってね。』

『それを咎める積もりはありませんわ。それだけ八神さんがご両親に愛されていた証拠なのですから、謝る事ではなくってよ?』

『俺たちの話、ちゃんと聞いてるじゃないですか。談笑しながら盗み聞きするなんて淑女の嗜みじゃないぜ?』

『私の髪の毛を「金髪ドリル」と評した貴方への細やかな意趣返しですわ。』

『俺が名前を言ったのは、髪の毛より前なんだが:どこまで聞いてた?』

箒と一夏はさつきまで年上の割には馴れ馴れしくも、不快感が湧かない柔和な口調で話していたエイジが詰問するような冷徹な口調になっていた

事に気づいた。まるで今迄が作為的で自分達から何かを聞き出す為に、近づいたんじゃないかと疑う程で――

『私が聞いたのは貴方の名前だけですわ。私と同じクラスと同級生の方がエイジさんに何か話をしていたようですが、興味があったのはエイジさんと他の新任の警備員でありましたので:』

『そうか:すまないね。きつく聞いたりして。』

『いえ、箒さんに褒められた所を見た時に妙に女々しくヘラヘラしているように感じたので:寧ろ男らしい顔を見て少し見直したところですよ。』

『お前:私の名前も聞いていたのか:』

『これから一年間同じクラスで勉強に励むのですから、他人行儀な呼び方では寂しいですよ。』

『すまない!えつと:セシリア:さん:~!』

『無理をしなくてもよろしくてよ。』

『そうか!セシリアでよいだろうか!』

『改めてよろしく願います。箒さん。』

『ああ!』

箒は新任警備員からカウンセラーを受け姉と真面目に話し合う機会を貰い、クラスメイトと友達になった。ISの生みの親ということで、質問が殺到し鬱屈としたストレスが溜まる一日目がスタートすると予想されると考えていたが、本来の史実（メメタアツ！）とは異なり相談相手に足る人物と関係を持ち意外な好スタートを切る事が出来た。

そんなこんなでスムーズに好感度アップイベントが進行する中――

キーンコオーンカーンコオーン♪

休み時間が終わり、1時限目のチャイムが鳴った。

『お？そろそろ時間ですな。俺は職務に戻って不貞を働く不審者がいたらアームロックをかけに行きますかね。箒さんと一夏さんはIS初心者なんで、セシリアさんの様な先輩のアドバイスは積極的に取り入れておく事を勧めておきます。無論言葉通りに受け取るだけでなく、メモとか取っておいた方が良い事も付け加えておきます。』

『色々とアドバイス有難うございます！今後の学生生活の参考にしようと思えます。』

『姉の件では大切な話をお聞かせ頂き、大変感謝しております。偶に時間が空いていれば相談相手になって頂いても宜しいでしょうか？』

『いいいいいよ。人生の先輩として、ドンと聞いて来て下さいな。』

『俺もエイジさんみたいに余裕があつて懐が深く頼もしい大人になつてみたいですー！』

『H A H A H A！道のりは険しいぞ？まあ、ここで一つアドバイスだ。《これでもかかってぐらい冷静さを保っている奴こそ人生の勝者》ってな？』

『???? どういう意味ですか？』

『其処は自分で考えたまえ。』

自己流アドバイスを残してエイジは去って行った。

信頼できない作家は最初から見限った方が良いというのはよく言った言葉なのだ……

本来のストーリーとは異なるスタートを迎えた本作。

戦闘したかったけど期待してた方々の期待を裏切るようでほんとうすまない…

だって個人的にハーレム作るのは構わないけど、もっと納得できる形で惚れるように設定したいのです！（メタに次ぐメタの連続）

だから、チヨロインと言われているセシリアですが直ぐにデレる事は絶対にしません！

トップクラスの朴念仁でホモ疑惑すらある一夏には身体・精神・I S技能共に納得出来る強さに到達してから、各ヒロインと本心から恋仲になるように話を進めていきます。

主要人物とさつそく関係を結ぶことに成功したエイジ。

好戦的な気質と一夏に対して一種の執着心がある筈も、これを機に相手の立場に立って物事を考える切っ掛けになるでしょう。

I Sに深く携わる世界において常識知らずな一夏もアドバイスの意味を考え続けることは、今後の活動において大きく役立ち女性と適切なコミュニケーションを取る機会により多く遭遇する事になるでしょう。

次回もちらっと見てくれる方がいらっしやるとただただ嬉しい限りであります。